

# 大学に十年在籍

五高の頃は山登りをよくしていましたが、九州の山は山登りにとってあまり魅力がいんですよ。ただ阿蘇の根子岳はいいですね。あそこでザイル訓練をされていて、十メートル程落ちたんですが、幸い落ちた所が水溜りで助かったなんてこともありましたよ。

八代中、五高、東大とわりと順調にいったわけですが、五高時代に戦争が始まり、大学に入ったとたん学徒出陣させられました。見習士官として内蒙古に行きまして、そこで終戦を迎えましたが、満州と違って周囲が砂漠だったため、ソ連の進攻が遅れ命拾いしました。戦後は北京郊外で抑留されてましてね、その際、結核を煩い、帰国してから四、五年は実家で療養生活を送っていました。もう自分の人生は終わったという感じでしたね。

余生をどう生きようかと思索して

いたとき、大学から復学の誘いがあつたんです。当時の大学は六年しか在籍できなかったのですが、戦争による休学ということで特別に許可されたんですな。療養中は、世の中は本人が努力してもどうにもならない時もあるという諦観を学びましたが、それと同時に、こんな目に会うのも戦争のおかげだ、その戦争を起す国家というものを、政治というものを勉強してみたいという意欲も持ち始めていました。これこそ渡りに舟ということで、復学し、政治学の丸山真男教授のゼミに入りました。先生に師事できたのは、私の人生での最大の出会いだったと感謝しています。軍国日本を分析した丸山先生の論文は、今日でも日本の政治学の古典としてロングセラーになっていますよ。

このゼミでは、明治、大正の各界のリーダーを各自担当してレポートを書くことになったのですが、私は



来日したポーランド独立自主管理労組「連帯」のワレサ議長にインタビューする内田健三氏。

迷わず郷土の大ジャーナリスト徳富蘇峰を選びました。一夏、有佐駅から水俣の洪水文庫に通ってレポートを書きあげました。これが縁で共同通信の政治部記者になったわけですが、本音には大学に十年も

の会社に入っても仕方ないという気持ちもあつたのでしようね。



中央、地方を問わず知己が多い。五高の同窓会にて星子市長と。左端が内田氏

## 政治記者時代は池田・佐藤時代

政治部記者として現場にいたのは昭和三十年代から四十年代にかけてです。めぐり合わせが良かったのは、三十五年から十二年間、五高の先輩である池田さん、佐藤さんが首相をされていたことです。おかげで取材はやり易かったですよ。

池田さんは酒豪で、私が夕方秘書官室に行って取材をしていると、出てこられて、酒を飲むかと誘ってくださったり、実に気さくな方でした。酒も豪快な飲み方ですね。佐藤さんは、

とりすました感じで近寄りにくいという定評でしたが、三十四、五年だったかなあ、ある年の正月、雪がひどく降り続いていたので、今日は来客がないなと思って佐藤さんの私邸を訪ねたんです。勘が当たって誰も来客がなく、家にあがりこんでゆっくり話をしました。先輩後輩の親近感もあり、当時ライバルだった池田さんとの関係をしみじみ語ってくれました。その時の話は今でも強く印象に残っていますよ。

## もっこすのエネルギーを大切に

熊本県の特徴として、一つはジャーナリストが多くでているということですね。朝日新聞の大記者、名編集者だった池田三山、鳥居素川、毎日新聞元社長の本山彦一、電通創設者の光永星郎、評論家の細川隆元など著名な方が多いです。これは熊本が明治維新に乗り遅れたために、もっこす精神で政府を批判するといふ土壌が育ったからだと思われに解り積まっています。ある意味ではいいことではないでしょうか。

県民性を言えば、政争が激しいということですね。世間ではよく熊本を

保守反動の県と言いますが、私はそうは思いません。たとえば横井小楠の実学の流れからだと花岡バンドからは明治のキリスト教指導者が数多くでています。その一方で神風連のように大変保守的なものもある。熊本県ほど進歩派と保守派が雑然混然として、激しく自己主張しているところはないと思います。しかもそれらがすごいエネルギーをもっている。それぞれのエネルギーが内にせめぎ合うのではなく、どうしたらうまく外部に向けて発揮されるかが県の今後の課題ではないでしょうか。